



巢林子の三面

露伴原稿



本問文庫
文庫 14
A149



文庫14
A149



No.

近松	山	林	子	は	二	つ	の	途	に	於	て	其	の	即	ち	遂	げ	て	る
了。	一	つ	は	我	邦	の	古	く	々	々	の	雜	書	や	傳	説	を	於	け
事	柄	を	自	己	の	於	て	牙	削	進	す	よ	う	て	咀	嚼	し	又	自
唾	液	胃	汁	を	う	う	と	溶	解	し	こ	し	て	う	れ	る	自	心	の
心	縛	腸	を	交	理	し	た	こ	と	心	を	る	海	軍	盛	衰	記	や	
多	我	物	語	や	義	経	記	や	今	昔	の	語	や	著	了	行	矣	や	
さ	り	り	の	書	引	ば	靈	異	記	や	元	吉	の	釋	書	や			
謡	曲	や	雜	曲	や	縁	起	や	漫	の	歌	又	各	地	の	傳	説		

山林子の二回

アアとアアヤ

山林

れははるるゆと、いふ理窟も少いか、今日これを
 愚弄するは、是れは、
 餘り詩的自由をほし、
 も多少歴史的知識の有るを、
 刻を同する場合、
 を著せしめ、
 せしめ、
 的知識を、
 當時の一般教育と比例して、
 いて其點の推移も、
 一般の民衆、

社会より出た人才として、
 と自作との関係、
 いと自作との業社、
 も、
 ても、
 二、
 こ、
 度、
 う、
 あ、

は近頃の如く、詩的、美的、浪漫的、
 的の如く、たのび、たのび、たのび、
 と、この、遠く、遠く、遠く、
 如何は、しく、ま、ま、ま、
 古く、今、昔、今、昔、今、
 水と、新書は、大、大、大、
 しい、書、と、と、と、
 の、記、し、て、る、勝、は、ある、ま、
 あり、と、と、と、と、と、
 くの、書、か、水、を、居、る、の、を、常、と、し、
 大、平、記、を、保、つ、て、

(田 幸)

田幸

即ち、近頃の如く、その時代の人の、
 の、歴史的事柄を、如何に、
 ことは、その、その、その、
 の、描、き、し、て、お、く、と、り、
 の、水、は、天、池、り、馬、鹿、と、し、
 即ち、近頃の如く、その時代の人の、
 の、歴史的事柄を、如何に、
 ことは、その、その、その、
 の、描、き、し、て、お、く、と、り、
 の、水、は、天、池、り、馬、鹿、と、し、

(田 幸)

田幸

又高麗にて有るのうう仕方の多い、今日の作家が
 着いた人の時流も維新時代と同じ世態のやうな思ふ
 てあるのよ葉にて、本音が陸軍中尉出張を命じ
 られた学士出ぐいおの友吏と女学をううのあつさん
 とが二層の言辯を別れたやうなことを、立派な
 大名夫婦のやうな、又面白い物の認識の文一
 いのよあがして、百何十年も二百年もあの人又文
 化文政あううの刀鍛冶の鍛へと刀を仰いでや
 るとも、それは其人の臨書で、又それを習はる人
 も多く、針女れば針女、方が舞程白癡だとして

(田 幸)

平気な平気な意気、舞臺然と在る空箱をして万
 事の中をさく、神仙譚的、劇曲的の事を載せてある
 のひあり、民衆はと批評するれと愛あつてある
 のひあり。そこへして来た空箱子が空箱の空
 を張つて舞臺の舞臺にたつて不思議は(附)
 多いのひ、今何れか之を論ずる時は、其論は心
 しくあつてあるやうな、昔の事情がわか
 論ひある。空林子の如くは舞臺の事を書りて、
 天皇のさりをさうやうと、勇士の眼力又銅の足
 熔けて落ちさうやうと、それは何様もそれの時代

(田 幸)

直松の昔よりつともうは相違ない。詞章の苦心
 なるは、世法浄よりうは却つて世のうは存した
 らしく思はれる。法構もすべし院の繁から世人の知
 つてあつてもいふ能はる。何れか又新味
 をかゝるべきをふして、やんやと云はせりてく
 ちくもれそあつたので、申す昔をたつては、吾像
 するは難くさい。然し、言ふ言ふは、自らはやは
 り時代浄よりうは世法浄よりうはるを悦ぶ。何
 も浄よりあはれ事ごとくか多いのを厭はしく思ふ
 事、一生の事なきことと云ふのは、たゞの如く

と同じこと、直松が随分好むことを書りて
 せよ、それは時代よりいひては、高士してゐるの
 ちうへ、直松の爲る病は、何事をもいひ。時代高
 とりしとは、何時の代でも、これ大光明、吾等
 口説で、お有難いことなるのたゞしなり。直松の
 時代浄よりが、如何なる事かあるうとも、
 ちうへ今日の我等々、浄より事あるさうさうが
 多いうへ、宗教の興感をも教へるさうさうの
 ば、白癡の言ひ言ふ事、たゞと、自ら者なるの
 さまふと、心のあつた。然し時代浄瑞穂は

鏡を突かすれやうも知らぬのやある。そこは然
 は其人物の味方々うして怨やれ憎まれ何の様を
 可きものとしてのみ描写しなるとは、其人物若く
 然るんが親とて一人物に冷酷譴詆甚く憎む
 稱福又仕組んだとして、善悪又然るん又同族して
 は有りさうと思はれる。或程今日鬼越事件を評
 うか否かは姑く擱きて、如何なる然福いふ事情
 了。とりよ考へ一種の心算。此考が如何なる
 と同時に、他の方々の同族して書いふもの心算
 が賢いとてある。其意は此の方々の同族する
 と同時に、他の方々の同族して書いふもの心算
 了。とりよ考へ一種の心算。此考が如何なる
 うか否かは姑く擱きて、如何なる然福いふ事情
 は有りさうと思はれる。或程今日鬼越事件を評
 稱福又仕組んだとして、善悪又然るん又同族して
 然るんが親とて一人物に冷酷譴詆甚く憎む
 可きものとしてのみ描写しなるとは、其人物若く
 は其人物の味方々うして怨やれ憎まれ何の様を
 鏡を突かすれやうも知らぬのやある。そこは然

別途の考を抱く人もある。それは近松の當時の
 東事と對して之を評するに及ばぬ、其の事
 件申の人物の皆物故してあるのは、其の事
 關係者が生存してあるものである。そこで餘り一方
 尙存する同族して他の一方を思ふに、其の事
 しく其の不義又は不人情等道徳上の責任をさし
 出したりする場合は、其の生存せる尙存の關係
 者等から、如何なる抗議、(現) 又は諍論、又は
 報復の手段等を取らるる虞がある。そこで近松が
 思い程の同族を考へ、思い程の筆加減を爲した方

加減をいふは思ひなく、所謂道人的
 然し自ら導は然様をいふ近松を押し付けて、世智何人
 的加被は自ら導は然様をいふ近松を押し付けて、世智何人
 リよこももる。近松の導り中の同格の善悪
 西の藝術的價値を第1に下げ、引下げる。近松の作
 斯様りよ見方があつて、是より是ぬは、近松の作
 事には振返して、世智何人か、世智何人か、世智何人か、
 欲しいのりある。世智何人か、世智何人か、世智何人か、
 する、純な藝術的なること、これ藝術は生れて
 浄なりは其一事を世智何人か、編みたるに
 する、純な藝術的なること、これ藝術は生れて
 欲しいのりある。世智何人か、世智何人か、世智何人か、
 事には振返して、世智何人か、世智何人か、世智何人か、
 斯様りよ見方があつて、是より是ぬは、近松の作
 西の藝術的價値を第1に下げ、引下げる。近松の作
 リよこももる。近松の導り中の同格の善悪
 的加被は自ら導は然様をいふ近松を押し付けて、世智何人
 然し自ら導は然様をいふ近松を押し付けて、世智何人

然様りよ意味で、近松が鏡全的のせよ同格を一切
 平等の一人の心あるとすこと、それは如何し、通
 人的の度量のあり、又通人的の評議を聞える。然
 一義一然様りよ事、眞實相をとり、それは近
 松の取つて辯證のやり、聞えるが、実は却つて
 近松の取つて其の面白く、いふこと、近松は
 たい世智何人の世智何人か、長け、人とす、其の

さん如同格して描き、同格、然さん、
 も同格して、い程、其の同格、
 ること、必要の事、如く思へる、
 然様りよ意味で、近松が鏡全的のせよ同格を一切
 平等の一人の心あるとすこと、それは如何し、通
 人的の度量のあり、又通人的の評議を聞える。然
 一義一然様りよ事、眞實相をとり、それは近
 松の取つて辯證のやり、聞えるが、実は却つて
 近松の取つて其の面白く、いふこと、近松は
 たい世智何人の世智何人か、長け、人とす、其の

である。勿論のこと老境に入らぬと、
 人々の心と、大なる人物を立つては、
 仕方の時、於て既に此の委曲の解釋と寛大の批
 評とを保持せんとするものであることは疑を定れ
 ぬが、老境に入つてはそれが如力の勉強的でなく
 て、自然的油然の生じて来るものである。近松
 世徳、人情の好む瀟灑さ、結果として、か世治淨
 より、松 教 て、隨 分 厭 ま 奴 又 辨 る 痛 且
 づ同位ある態度を著して、いさむぐ其等の人
 物を著つて、そ の は、世 給 何 才 的 の 利 害 観 念

又、人 心 の 性 癖 の 否 の 天 賦 的 存 在 を 認 め る こ と を 宥 恕 と
 して其人を諒せんとするの寛大さるるを生ずるもの
 傾向も伴うて、成すべく事物の委曲の解釋、自 然
 理、の 明 平 和 を 悦 び 欲 す る 老 境 心 理 の 必 然
 つては、一つは又波瀾の増長を好む老境心
 て、性 熱 の ム が 減 じ、か い 日 々 と す る 時 の 衰
 て又血氣漸く老い、觀 察 智 が 善 通 圓 満 と な つ て け
 のあるもの、ま は 誰 の 心 づ く こ と を 認 め る、そ の
 た境地が、真 実 と 成 せ る 存 在 と な る、自 省 心
 である。

の罪を認むる

下と
 とし



